ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.1 January 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

1

CONTENTS

・巻頭言
ブラジルの天理教②
／永尾　教昭 1

・「おさしづ」語句の探求（最終回）
「おさしづ」における「道」の用例まとめ②
／澤井　治郎 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（5）
天理教教理における海外伝道について（2）
／山西　弘朗 3

・特別寄稿
バゼビバカ・ピエール会長追悼
／森　洋明 4

・ライシテと天理教のフランス布教（27）
20世紀のライシテ③
／藤原　理人 6

・宗教伝統における聖典の意味構造（10）
シャンカラ派の聖典解釈と「出家遊行」
／澤井　義次 7

・現代宗教と女性（34）
技能実習生と日本社会
／金子　珠理 8

・コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（19）
5．コロンビアの体質 10
／清水　直太郎 9

・2021年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（7）
第3講：130「小さな埃は」
／尾上　貴行 10

・おやさと研究所ニュース 11

第16回国際哲学者会議で、本学の教授2名が招待講演／第344回研究報告会／第46回オーストラリア宗教学会年次大会にて発表／2021年度公開教学講座のご案内

巻頭言

ブラジルの天理教②

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

1929年ブラジルに渡った大竹忠治郎は、筆舌に尽くしがたい艱難の道中を通り天理教の布教に専心する。

まず異国で布教伝道することの困難さ以前に、当時のブラジルにおける日本人の暮らしそのものが悲惨な状態であった。マラリアや破傷風、アメーバー赤痢などに苦しみ、多くの人が命を失った。とりわけ乳幼児死亡率が高く、1925年にパラナ州カンバラ市の集落に入植した日本人は50家族未満であったが65人の死亡者を出しており、そのほとんどが子供であったという。また、1930年から35年の5年間には同集落に約250軒の日本人家族が暮らしていたが、390人の死者を記録している。[(1)] 一家族の構成人数がわからないので正確に把握することは難しいが、かなり高い死亡率であることは間違いないだろう。

そんな中でも大竹の布教意欲はいささかも衰えることなく、1936年にぢばで執行された教祖50年祭を目指して、前年におぢば帰り団参を実現する。これがブラジルからの初めての帰参団体であった。さらに1937年の立教百年祭にも団体を組織して帰参している。言うまでもなく、当時は今と違って船旅である。1935年の団参はブラジルから日本まで片道2ヵ月かかっている。つまり往復するだけでも4ヵ月かかることになる。それを3年で2回実施しているのだから、天理教信者のぢば信仰の堅固さがわかる。

大竹の生涯でその身が最も危機に瀕したのは、先の大戦中だろう。1942年1月ブラジルは枢軸国（日独伊）相手に参戦する。それに伴い当然日本とブラジルの国交は断絶となり、在伯日本人はドイツ人、イタリア人とともに当局の激しい弾圧を受ける。そして当地の天理教の指導的立場にあった大竹は、1942年3月17日から1年3ヵ月、サンパウロの獄舎に収監されることとなる。その獄舎でもトイレ掃除を率先して行うなど、ひのきしん（神への感謝を行動に表すこと）に励む。まさに、大竹の白熱の布教活動は留まるところを知らなかった。

そうした中でも、異国の地ならではの障壁があった。それは、言葉の問題である。大竹が派遣元の南海大教会に送った手紙がある。

「初めて外人（ブラジル人＝筆者注）のお婆さんに匂いがけ（布教＝同）を致しましたが、日用の会話も不自由な時ですから此処でも奥の手を出して、手真似身振り今思いだすとプッと吹き出すことがありますが、…漸く相手に通じてお助けをさして頂いた時は、本当に涙が出る程嬉しかったものです」[(2)] とある。相手の素性を知らずに布教したこの高齢の女性はカトリックの布教師であったようだ。同じ手紙には、店で便箋一つ買うのに散々苦労したことも記されている。

異国で人に教理を伝え信仰に導くためには、その国の言葉が話せることは必須だ。筆者も約25年間、フランスで布教生活に勤しんだ。筆者の場合、大学でフランス語を履修し、さらに彼の地でも学校に行ったが、それでも難儀した。大竹の場合、まったくポルトガル語の素養もなく、無論、現地の学校に通うなど到底不可能な当時の情勢であった。その困難のほどは推して知るべしであろう。

言葉の問題を完全に払拭するには、ブラジルではブラジル人が、フランスではフランス人が布教すればよいのである。そして、それは彼らにとって「海外布教」ではなく「国内布教」だ。つまり、まず海外布教から国内布教に移行して、そこから初めて異文化圏伝道という段階に挑戦していくことになるのだと思う。

［註］

（1）矢持善和『親ひとすじ―大竹忠治郎の「手記」解説―』（養徳社、平成24年）

（2）『南海大教会史　第3巻』（天理教南海大教会史料集成部、昭和51年）

「おさしづ」語句の探求（最終回）

「おさしづ」における「道」の用例まとめ②

天理大学人間学部講師
おやさと研究所兼任研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

「おさしづ」においては、明治21年4月に東京府で教会設置が認可されるころから、「道」という言葉が多く見られるようになっている。これは、示唆的なことである。教会設置が認可されるということは、「天理教会」あるいは「天理教」が世の中に誕生するということである。「天理教会」という制度ができると、教会に所属しているか、していないかという、内と外の境界が明確になる。

前回の連載のおわりに、次の「おさしづ」を引用した。

> 天理王命と称するは、一つの宗旨である。天理王命と元一つ称するは、天の月日である。元一つ始めるは女一人である。元よく聞いてくれ。長々元一つ分からなんだ。未だ〳〵ほんの一寸の初まりである。危なき道や〳〵思えども、何にも危なき道やない。何ぼ往還道でありても、心に誠無うては通れようまい。心に誠一つさいあれば、何にも危なきはない。楽しみ一つの道やある、と、諭してくれるよう。（さ21・7・31　中台勘蔵願）

「宗旨」というのは、宗派などの所属を表す言葉で、明治の初めごろは、religionの翻訳語としても使われた。したがって、この引用の冒頭部分を現代風に言い換えると、天理王命と称する一つの宗教（つまり、天理教）ができている、と意訳することもできるだろう。この「おさしづ」においては、その元となっている道を通るように諭されている。その道を通るためのキーワードとなっているのは、「誠一つ」ということである。

「おさしづ」における「天理教」「天理教会」

「おさしづ」における「天理教」と「道」の意味合いを比べるために、「天理教」「天理教会」の用例をいくつか列挙する。

> さあ〳〵天理教会やと言うてこちらにも始め出した。応法世界の道、これは一寸の始め出し。神一条の道は、これから始め掛け。元一つの理というは、今の一時と思うなよ。今までに伝えた話、かんろだいと言うて口説き口説き詰めたる。さあ〳〵これよりは速やか道から、今（いま）んまにかんろだいを建てにゃならん、建てんならんという道が今にあるという。（さ22・4・18　刻限御話）

> まあよいは〳〵人気々々、世界々々、誰々天理教会には押し手は無い。事情は皆世界で集まりたる処、これで盛大や〳〵と思う心が間違う。……めん〳〵真実誠一つの理を立て、艱難の道も忘れてはどうもならん。世上明るい道でも何時暗がりとも分からん。これまでの道を忘れぬよう。忘れさえせにゃようようの道は許してある。神一条より外の道は通れようまい。（さ24・7・23　本席御身上御障りにつき御願）

> 世界盛大、天理教盛大、たゞ一つ元出してみよ。（さ27・11・17　昼のおさしづにより夜深教長外五名にて御願）

> 天理教会と言うて、国々所々印を下ろしたる。年限経つばかりでは楽しみ無いから、一時道を始め付けたる。神一条の道からは、万分の一の道を付けたのやで。（さ30・7・14　安堵村飯田岩治郎神様下られる様申されるは道具主でも出られるや如何と心得まで願（前日御願通りだん〳〵信徒へ及ぼす故心得まで願））

> 日々世界天理教ほんに偉いものや、と言うようになったは容易やない。内々から元の事掴まえどこ無いようになってから、何と沖へ突き流されたようになってから、どうするか。何の理があるか。（さ34・5・25　昨日より本席御身上大変のぼせると仰せあり、御障り中本日朝増井りん教祖赤衣仕立て下されし事に付申し上げ下され、それよりだん〳〵御話ありて本部員残らず寄せと仰せあるにより、一同打ち揃い御話（御敷布団しかず御坐りでおさしづ））

このように、「天理教」ないし「天理教会」は、「応法世界の道」、「皆世界で集まりたる処、これで盛大や」、「世界盛大、天理教盛大」、「世界天理教ほんに偉いものや、と言うようになった」とあるように、いずれも世界（社会）の側の視点で言われている。その視点は盛大とか人気という言葉から分かるように、多くの人が天理教に集まっているという事実に向けられている。

一方で、「おさしづ」では、そうした「天理教」の状況について、「神一条の道からは、万分の一の道を付けた」だけであり、「神一条の道は、これから始め掛け」とか、「たゞ一つ元出してみよ」とか、「神一条より外の道は通れようまい」というように、「天理教」の元にある神一条の道を通るようにと諭されている。さらに、「かんろだいを建てにゃならん」「真実誠一つの理を立て」とも説かれている。

「道」の諭し

このように「天理教」と「道」を並べてみてくると、「天理教」は世界（社会）にあり、「道」は一人ひとりの心や行いのなかにある、と言えるのではないだろうか。そうした場合、「道」が「天理教」とは異なる特徴の一つとして、内側と外側の区別が非常に曖昧であるということが挙げられる。「天理教」の一員であるかどうかは、さしあたり教会の構成員であるかどうかによって判断できるが、道を通っているかどうかは、一人ひとりの心遣いや行いのなかにのみ基準があることになる。

親神の思召に沿う道は、どのような道であるかが問題である。まず、第一に挙げられるのが、神一条ということである。今回引用した中にも何度も出てきたことである。さらに、元ということが強調され、何もないところから教祖が教え、付けられた道であること、それは艱難苦労の道であり、これからの歩みを進める上でも、それを忘れてはいけないということが、「おさしづ」全体を通して繰り返し諭されている。

この道を通る心構えとしては、「誠一つ」であることが説かれる。「誠一つ」とは、「おかきさげ」や『信者の栞』によれば、「かしもの・かりもの」の理を心に治め、八つのほこりを角目に心のほこりを払い、たすけ一条に生きることである。最終的に、「道」の諭しは、いつもこのことを説かれている。

天理教教理における海外伝道について（2）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
ジュニア・フェロー
山西　弘朗　*Hiroaki Yamanishi*

『おさしづ』における海外伝道について

前回（2021年11月号）では、台湾にまつわる「おさしづ」の中で、異文化社会における伝道に関するものを取り上げて紹介したが、今回は、海外伝道の心得、心構えについての「おさしづ」を紹介したい。どちらの「おさしづ」も、山名大教会による組織的な台湾伝道の黎明期に頂いたお言葉である。

山名大教会初代会長である諸井国三郎は1840年（天保11）に現在の静岡県袋井市で生まれ、三女の身上から入信した。1888年（明治21）には山名分教会を設立し、その5年後には遠国といわれた東北各県へ手分けして布教した。さら1897年（明治30）には56歳で台湾伝道を自ら指揮し、ほかの役員らを布教師として伴い、台湾へ渡った。

まず、台湾への布教と、その資金的後ろ盾となると考えた殖産興業について伺った「おさしづ」が残っている。

> さあ〳〵尋ねる事情〳〵、さあ尋ねる事情には、これまで遠い話にも聞いて居る。事情一時以て尋ねるは、遠い話には、一寸追々の理ともいう。身上に一つの事情無ければ、何時なりと。さあ速やか許し置こう〳〵。

これに引き続いて、諸井国三郎が20日頃に行く事について伺ったところ、

> さあ〳〵心得に委せ置くによって身上も壮健、皆々勇んで心事情、心一つ嬉しい。真実心理（り）を以て鮮やかなら、何時なりと許し置こう〳〵。（明治30年6月5日）

との「おさしづ」を頂かれた。遠く離れた台湾において布教するには、身に現れてくる姿、つまり身上に事情がなければ、いつでも進めよとのお言葉である。さらに、速やかに許し置こうというお言葉に、遠く離れた海外へも天理教の教えが早く広まることを心待ちにされる親心を感じる。また、ともに布教に携わる者がみんな勇んで心を合わせることを嬉しいと感じ、教えを広めたいという真実の心が鮮やかであるならば、何時でもよいとの心強い神の言葉である。

ところが、国三郎がいよいよ台湾へ向けて出発という時に、予期せぬことが発生する。出発の前日、つまり7月13日の夜、分教会では役員、部内の主だった人々が集まり、台湾布教のお願いに十二下りのおつとめが勤められた後、送別の宴席の最中に、3歳になる国三郎の6女なつのが激しい引きつけを起こした。居合わせた人々は動揺したが、その場を鎮めるように国三郎は、「たとえこの児が死んでも、明日は出発するから、後で葬式をしなさい。どんなことがあっても嘆くではない。定めたからには、台湾で死んだら生れ替わって来ても、台湾で必ず道をつけるから、お前もしっかり心を定めていなさい」と夫人に言い渡した。命懸けで台湾伝道に取り組む姿が目に浮かぶようである。

ここには、会長として自らが先頭に立って台湾へ教えを広めたいという責任感が現れている。それと同時に、国三郎のこの決意の言葉は、上述の「おさしづ」の内に力強い神の力添えと勇み心を感じ、そのお言葉にもたれきり、わが命を捨ててもという神一条の真実の心を定めることを神が望んでいるとの悟りから発せられたようにも感じられる。

さて、翌7月14日、袋井駅は教会関係の人や近郷の人たちの見送りで埋まった。四斗樽のお鏡が抜かれ、壮行の歓声さんざめく中で、人の腕に抱かれて見送りに来ていたなつのが再び引きつけを起こした。「この児が死んでも、決して沙汰をするな」と国三郎は言い残し、途中、名古屋で下車し、愛知支教会に立ち寄って、同行の者とともに洋服を購入し、おぢばへ向かった。そして朝、出発前日を当日に6女なつのの身に起こった突然の身上について「おさしづ」を伺うこととなった。

> さあ〳〵尋ねる事情〳〵、前々事情速やか許したる。だん〳〵よう〳〵の道を調え運んで、さあという一時の際、小人身上心得んという。心得んから尋ねる。尋ねるから諭そう。よく聞き取れ〳〵。国を立つ一時多くの中楽しみもあれば、又中にほっと思う者もある。よう聞き取れ。道のため教（おしえ）一つの理を聞いて定めた精神一つの理は末代という。この理をしっかり心に治め、辺所（へんじょ）立ち越す処、勇んで〳〵どういう事もこういう事も、一度定めた理は末代の理という。さあ〳〵皆々それ〳〵治めてくれ。

さらに永井藤平同行の願いで、

> さあ〳〵精神さえこうと言えば、明らかなもの。こうという精神あるなら、勇んで勇んで。さあ〳〵皆んな心に委せ置こう。（明治30年7月16日　朝）

とのお言葉をいただいた。

今回の台湾伝道についてはすでに速やかに許されており、いろいろと準備を進めてきたが、突然6女に現れた身上患いをどのように悟ればよいかというなら、これから出発という時に楽しみもあれば、「ほっと思う」者もいるだろう。一度定めた「心の理」は末代まで続くものとして、いろいろなことが起ころうとも勇んで取り掛かり、この決意が末代まで続くということをしっかり心に治めて台湾伝道に取り組むように、との励ましのお言葉である。つまり、いまだ状況もはっきりとわからない未知の布教先である台湾において、命懸けで布教に取り組むと心に定めたなら、その決意は末代に続く「理」として、国三郎だけでなく、山名につながる人々へと引き継がれるものである。それゆえ、どのような事にも動じることなく、勇んで取り組むことが海外伝道において大切である。このことを改めてお諭し下さったお言葉であり、温かい親心が感じられる。

特別寄稿

バゼビバカ・ピエール会長追悼

国際学部教授
おやさと研究所兼任研究員
森　洋明　*Yomei Mori*

2021年10月1日、コンゴブラザビル教会5代会長のバゼビバカ・ピエール氏が出直した（死去した）。突然の出来事だった。コンゴの医療体制が不十分なこともあるのだろうか、死因が特定できないままだった。教会関係者によれば、亡くなる数日前までは体調を少し崩していたようだが、亡くなるとは誰も予想だにしていなかったという。コロナウイルスの検査は陰性で、アフリカでは死因が一番のマラリアは疑われたものの、特定はされていなかった。「肺に影があるとの検査の結果を受け、医者の治療を受けるから大丈夫」と本人からSNSで連絡を受けたのが9月30日の夕方だった。しかし、その翌日の1日の朝、容態が急変したので、車であちらこちらの医療機関に出向いた。しかし、治療できる体制が整っていないと断られ、首都の総合病院に行ったところ、付き添いが受付で入院を交渉している間に、その待合室で息を引き取ったという。享年60歳。今年6月に還暦を迎えたところだった。

コンゴブラザビル教会は、1966年9月、中山正善2代真柱の主導の下で設立され、すでに50年以上の伝道の歴史がある。2016年には真柱夫妻や真柱後継者が巡教されるなかで、盛大に設立50周年が挙行された。おやさと研究所では、この『グローカル天理』を通じて堀内みどり氏がその歴史を振り返ってきた。また、「海外部の後方支援」としての役割を担っている研究所の活動として、しばしばこのコンゴでの伝道の事例を取り上げ、「伝道フォーラム」や「伝道研究会」の場を通して、さまざまな角度から検証をしており、それらは『二代真柱とコンゴ布教』（2001年）や『コンゴ伝道の諸活動』（2011年）などにまとめられている。

私自身も海外部勤務の時代からコンゴ伝道に関わってきたこともあり、本誌を通じてコンゴ伝道について連載し、またそれを『伝道宗教による異文化接触』（2013年）でまとめている。この連載のなかに見られるさまざまな角度からの問題提起は、実は、実際の伝道の現場で、常に異文化との狭間に置かれ多くの問題に直面したバゼビバカ氏から大きなヒントを得ていたのである。彼とは23歳で出会ってから30年以上の付き合いがあり、友人とも言える存在だった。私がコンゴに常駐していた当時（1986～1989）は、私自身のフランス語運用能力が十分でなかったので、彼と話す機会がそれほど多くなかったが、90年代以降、コンゴに行くたびに、コンゴ伝道の将来や現状での問題点などについて語り合った。ときには彼との議論が熱くなり、お互いに冷却期間を必要とすることもあった。そして、彼の布教伝道に対する思いは常に真剣そのものだった。

バゼビバカ氏は父親からの信仰を受け継いだ。13人兄弟姉妹の末っ子で、兄弟姉妹のなかでは彼を含め3人が信仰を受け継いだ。幼い頃から両親とともに教会に通うなかで、彼の信仰は自然と身についていったと言う。「教理など最初は分からなくても、おつとめをしてそれが自然と身についていった」と、彼はしばしば自身の信仰の原点を振り返った。彼の父親は、教会設立以前の布教所時代に集まってきたコンゴ伝道の草分け的な先人の一人だ。実直で正直だった父親は、日本人布教師からの信頼も厚かった。その父親の信仰を自然と引き継いだピエール氏は、父親譲りの実直さと真面目さを持っており、日本人にとって最も信頼のおける人でもあった。そして何よりも、さまざまな困難にもかかわらず、信仰を捨てることは決してなかった。

とくに、コンゴ人初の会長となったノソンガ4代会長時代は、教会の運営の上にさまざまな問題が起きた。なかでも、本部からの派遣布教師の引き揚げはコンゴ伝道の大きな転換だった。4代会長の下で人が集まらないだけでなく、教会から離反していった信者も少なくなかった。会長の理不尽な言動もあったようだ。しかし、ピエール氏はそれをむしろ自身に与えられた神様からの「試練」ととらえた。神殿での講話のなかでその時のことを振り返り「自身の信仰がこうしてあるのは、4代会長のおかげである」と語っていた。2000年の内戦以降の教会の復興のときも、常に「神様からの試しである」と悟り、さまざまな困難に立ち向かいつつ、むしろ自身の信仰をより強固なものにしていった。

1998年、4代会長が悪化する病気の治療のためにパリに行ったことで、教会では責任者が不在となった。その頃にはピエール氏が、本部にとって現地の様子を聞ける唯一の存在となっていた。当時コンゴでは政権を巡って武力衝突が勃発し、教会のある地域が戦闘の舞台となり、住民全員が南部の森へ避難する状況に陥ったのである。政府軍や反政府軍、また外国人の傭兵などに見つかれば命の危険すらあった避難だったという。彼は妻や子どもを必死で守りつつ、同時に教会に繋がる人たちの無事を祈った。ようやく無事に首都に戻ることができた彼は、詳細な様子を綴った手記を海外部へ送ってきた。情報がなくただただ心配することしかできなかった教会本部の関係者は、彼や信者たちの無事に安堵したが、同時にその内容に驚かされた。とくに教会を離れ、森へ逃げる様子が淡々と書かれた手記には、「ああ、もうこれまでか」と死を覚悟した瞬間も綴られていた。

内戦以降の教会の復興にいち早く着手したのもピエール氏だった。その歩みは、教会の敷地内に散乱したものを集めるところから始まった。教会建物は砲弾の被害を受け、附属建物の内部はすべてのものが略奪の対象となったようで何も残されていなかった。ノソンガ会長は当時パリで病気治療中だったので、責任者不在のまま教会の復興が始められた。一人また一人と避難生活から教会に人が戻ってくると同時に、教会をより組織的に運営する形が整い始めた。やがて教会の「臨時運営会」という組織に発展していくのだが、2001年、現地信者の要望を受け、不在となった会長の交代として、特命代表が置かれることになった。そのときには彼は実質的にコンゴにおける責任者となり、やがて2003年の会長就任へとつながっていった。

会長就任後の彼の教会の活動で特筆すべきは、さまざまな面で「現地化」を模索する動きだったと言えるだろう。「コーラス隊」の初期の曲に『おやさま』があるが、それは彼の作詞作曲だった。教会として「コーラス隊」の存在が欠かせないのがコンゴの宗教文化である。彼は常にコンゴの状況に合わせた伝道のあり方を意識していた。こどもおぢばがえり期間中に開催される「こどもの祭り」は、おぢばがえりができないコンゴの子どもたちに、少し

でもその雰囲気を味わってもらいたいと発案されたものだ。その他にも「教義研修会」の開催、「子どものコーラス隊」や鼓笛OBの「シニアバンド」の結成、「子どものおつとめまなび」の企画など、信仰が次の世代につながっていくための活動に力を入れた。

また、教会活動の物理的な側面を考え、収益活動にも着手。教会や布教所の空き地スペースを利用して「パーキング」や「貸しテナント」「農園」などを行い、その活動から得た利益を教会の活動資金に充てていく仕組みを整えていった。布教のさらなる展開にも専心し、積極的に地方都市に布教拠点を誕生させた。キンポモやキンカラ、ドリジー、ニアンガ、ムボチなど、これまで天理教が知られていなかった場所に講社を開き、その責任者を教会から任命するという仕組みを構築していった。責任者は教義研修会を修了したものから選ばれるという、研修会と連動した動きでもあった。さらには、今日700人以上の児童や生徒が集まる「天理総合教育施設」は、社会に閉ざしていたという天理教のイメージを払拭するだけでなく、教育行政が十分でないコンゴ社会において人材育成にも寄与し、先生や保育士、給食係など学校運営に関わる多くの雇用も創出している。

こうした活動を推進していくなかで常に問題となったのが、「教会」(Eglise)の捉え方だった。とくに、現地で考える「Eglise」のあり方と、本部から見る「教会」のあり方には、大きな隔たりがあると感じていた。このことは彼との話のなかで何度もでてきた話題だった。この点に関して、彼は常に現地と本部との「板挟み」の状態だったと言えるだろう。本部からの指示と現地教信者の思いには時として大きな隔たりがあり、その狭間で彼は幾度も苦悩していた。私はこの種の話し合いを彼と何度もした。時には理解してもらえることもあったが、時には話が平行線で終わることもあった。「そのことは日本人の口からコンゴ人信者に対して直接言ってもらいたい」という場面がしばしばあったが、それはその彼の微妙な立場を物語っていた。

コンゴブラザビル教会は、教会本部の直属教会(大教会、伝道庁、教会本部が特に認めた分教会、および教会本部が特に承認した海外の教会)である。したがって、教会本部から見ればその運営のための助成金を出す特別な存在かもしれないが、それでも全世界に17,000カ所ある教会の一つであることには違いない。少しニュアンスを加えて言うなら「一つの教会でしかない」のである。そして彼は「一教会長」なのである。しかし、「コンゴブラザビル教会」しか天理教の拠点がないコンゴでは、教会は天理教を「代表」する機関と見なされ、その会長はコンゴにおける「TENRIKYO」の「代表者」となる。したがって、コンゴではさまざまな場面で、「世界に布教を展開する一宗教の代表者」というイメージが彼に投げかけられたのである。

その背景として、日本と異なりコンゴでは、宗教が社会のなかで重要な地位にあることが指摘できるだろう。また、天理教が国の公認宗教となっていることも影響している。実際、国家行事に宗教団体が参加する機会が多い。「一教会長」である彼も、国家的行事に招待され、時には大統領や大臣と面会する機会もあった。またカトリックやイスラムの代表者とも議論する場もあった。参加は義務ではなかったが、コンゴの社会に天理教を広めようと願っていた彼は、そうした機会に積極的に参加したのである。教会で行う行事にも政府関係者や他宗教の代表を招くこともあった。彼はコンゴにおいて「TENRIKYO」のイメージを常に背負っていたのである。

彼には教会復興時から一緒に行動を共にした青年が数名いた。彼にとって一番大変なときに一緒にいてくれた同志であった。ただ、そのなかには何もできず「教会に必要なのか?」と周囲から指摘されるような人もいた。しかしピエール氏は、信者が増え教会の運営体制が変わっても、彼らを見放すことは決してなかった。彼らに何かできる役を与え、少しでも教会に尽せるように導いていった。

本年10月、ピエール会長出直しの報を受け、コロナ禍にもかかわらず、教会本部は海外部から2名と私の3名を葬儀のために派遣した。葬儀は10月16日(土)に行われた。出直してから2週間以上も経っていたが、おぢばから派遣される3人の到着を待ってのことだった。彼の葬儀はヨーロッパ・アフリカ課長が祭主となって執り行われた。コンゴにおける天理教の代表の葬儀が、本部から送られてきた代表によって執行されたことで、故人だけでなくコンゴにおける「TENRIKYO」の面目は保たれた。正確な数は把握できないが、葬儀には400～500人の参列者が集まった。葬儀までの半月の間は、毎夜通夜が行われ、連夜多くの人が会長宅の前で夜を過ごした。

葬儀の翌日、現地の習慣として「葬儀が終わるまで触れてはいけない」とされた故人に関わる部屋に入り、所有物や書類などの確認作業を家族や親族の代表、また教会関係者などの立会の下で行われた。家族といえども勝手に入ることは許されないようだ。会長の事務所は私が鍵を開けた。室内は彼が出直す前のままの状態だった。雨期にもかかわらず雨があまり降っていなかったこともあり、椅子や机、本棚などには細かい砂埃がうっすら積もっていた。会長の机の上には、3万コンゴフランと小銭が無造作に置かれていた。お金に関しては慎重な彼なら、決してしなかったようなことだ。おそらく、すぐ戻るつもりで事務所を離れたのだろう。もちろん、自分が再び戻って来られなくなるとは決して思っていなかったに違いない。彼の出直しが本当に突然の出来事だったことが実感された。

コンゴ人として、自国のコンゴ文化に誇りを持っていた彼は、よくコンゴの風習や習慣、食べ物、音楽について教えてくれた。車のなかで教会のコーラス隊の曲をかけることが多かったが、流行の曲もよく聴いていた。コンゴ特有の食べ物も教えてもらったが、それを押しつけるようなことは決してしなかった。習慣の違いを常に理解し、尊重していた。むしろ逆に、彼の方がさまざまな日本食を口にしなければならない局面があったようだ。その影響でいろんなものを食べるようになり、日本で食べられないものはないと言っていた。そんな彼が生前唯一できなかったのが、銭湯に入ることだった。人前で裸になるのは、通常コンゴでは考えられない。しかし、天理大学に進学した彼の息子が銭湯に行ったと聞き、いよいよ自分も行くことを決心し、次回のおぢばがえりの際には私と銭湯にいくことを約束をした。2年前のおぢばがえりのことだったが、それ以来、コロナ禍により彼はおぢばがえりする機会がなかった。彼との約束は果たせないままになった。

20世紀のライシテ ③

天理教リヨン布教所長
藤原　理人　*Masato Fujiwara*

いまだ世界中がコロナ禍から脱却できない中、フランスを含むヨーロッパ各国でウイルス感染の再拡大が大きな問題になっている。この原稿を書いている時点でも、オミクロン株がフランス領レユニオン島で初めて確認されたとのニュースが出た。こうした中、フランス政府はワクチン接種の推奨をどんどん強め、ワクチンパスポートなしでは大幅に行動を制限する対策を進めている。とはいえ、まだ街中の雰囲気は切迫した緊張感を感じるほどではない。むしろ年末商戦に向けて日曜日に店を開けるところも多く、人出は増えていくだろう。

さて、「20世紀のライシテ②」（2021年4月号）で第2次世界大戦まで見てきた。戦争が終わるまでは、法律によって非宗教化が図られてきた。ライシテという言葉も、第3共和制時にはドブレ法で「教員は非宗教者（ライック）でなければならない」という条文で使用されているが、それ以外では全く使われておらず、一般に浸透している言葉ではなかった。第2次世界大戦後、フランスは第4、第5共和制と続くが、その双方の憲法でライックという言葉が登場し、信教の自由が保障された。現行の第5共和国憲法では、次のように宣言されている。「フランスは、不可分の非宗教的、民主的かつ社会的な共和国である。フランスは、出身、人種または宗教による区別なしに、すべての市民の法律の前の平等を保障する。フランスは、すべての信条を尊重する」（工藤　2007年、187頁）。

この条文は憲法第1条であり（冒頭の一文は第4共和国憲法の第1条でもある）、フランスという国を規定している。第1文の共和国を修飾する日本語の並びはフランス語のそれと同じで、不可分のという語の次に非宗教的（ライック）が使用されている。「一般に国家が宗教に与えるステータスは、数ある可能性のなかの一例というのではなくて、その国の本質、その定義にかかわる問題となる」ことから、共和国の理念はライシテの原則なくして存在しないと言えるだろう（工藤　2007年、187頁）。

この非宗教的「ライック」の前に置かれた「不可分（indivisible）」、つまり「分けられない」という言葉も非常に重要だ。2つのフランスと形容された19世紀の思想対立、またそれ以前の封建社会に存在した貴族、宗教者、市民といった階層差など、いかなる形であれ国民の間の断裂は許さないという強い意志が、この言葉に集約されているように思う。まさに「制定された憲法は、二つのフランスの争いの終わりを示している」と言えるだろう（Baubérot 2010, p. 101）。

加えて、分裂あるいは統合という言葉が対象としているのが宗教であるというところに、長年にわたるフランスの宗教の圧力とそれに抗う闘争の歴史の奥深さを感じる。「『不可分性』は、宗教をめぐり分裂してきた国家にとって最大の課題である。この『不可分性』を『ライシテ』の思想によって支え、両者を対にして国家の性格を定義することを、フランスは選択した」のであり、いかに宗教からの脱却が至上命題であったのかがよく分かる（工藤　2007年、189頁）。

憲法の冒頭から国民あるいはフランスの法に従わねばならないすべての人は共和国の価値観のもと同列であると謳うのは、逆に言えば共和国の価値観にそぐわず社会に亀裂をもたらしうるものは持ち込んではいけないとも読める。

そこで改めて問題になるのが教育である。第5共和国憲法の前文にはこうある。「あらゆる段階で、公かつ無料でライックな教育を組織することは国家の義務である」。この後も、私立校への援助金や教師の給与払いなど教育面でライシテの論争が続いていくことになるが、「共和国が『不可分』indivisibleであるためには、共通のプログラムによって育成された国民が、そのアイデンティティを形成しなければならないのである」（工藤　2007年、188頁）。つまり個々人が勝手な思想信条を子どもたちに植え付け、国家を無視した共同体を形成することは歓迎されないことなのだ。日本の就学義務と違って、フランスでは学校に行かず家庭内で子弟を教育するホームスクーリングが可能であったが、2022年から廃止されることになっている。これはフランスが嫌うコミュノタリスム（communautarisme）を念頭に置いていると思われるが、家庭内で統合的な共和国理念に反する教育が行われることへの警戒心からだろう。

余談ではあるが、フランスには大きく分けて3つの学校がある。公立校、私立契約校、私立非契約校である。私立契約校とはフランス教育省のプログラムを順守する学校のことで、私立非契約校とはモンテッソーリ教育やシュタイナー教育のように経済的に独立し、自由な教育プログラムを施す学校である。BFMTVによればこうした非契約校は増加の一方で、2010年に803あった校数が2021年には1,657に増えている。国からの援助がない非契約校は当然授業料もかなり高いが、それでもそこに子供を入れようという家庭が増えているということだ。伝統的なカトリック系の私立はむしろ契約校に多いので宗教信条の問題ではないのだが、多数派ではないといえ公教育に対する近年の保護者の考え方の傾向が表れているのかもしれない。

ちなみに、フランスは男性選挙実施と女性参政権の確立との間の期間がもっとも大きい民主主義国家と言われていて、1848年の男性普通選挙から1945年の普通選挙まで実に1世紀近くかかっている。これは信心深い女性が、信頼する司教やカトリック教会の意思を選挙に反映させる可能性を嫌ったからだとも言われている。逆に言えば、戦後になって男女平等の考えの進展と並行して教会の女性への影響力も十分に弱まったことを示しているのだろう。

［参考文献及び参照インターネットサイト］
（リンクは12月1日時点）
Jean Baubérot, *Histoire de la laïcité en France,* PUF, 2010（pp.100-104）.
Michel Miaille, *La laïcité -solutions d'hier problèmes d'aujourd'hui*, Dalloz, 2015（pp.112-117).
谷川稔『十字架と三色旗』岩波現代文庫、2015年（259-261頁）。
工藤庸子『宗教VS国家』講談社現代新書、2007年（187-189頁）。
https://www.conseil-constitutionnel.fr/les-constitutions-dans-l-histoire/constitution-de-1946-ive-republique（1946年第4共和国憲法）
https://www.conseil-constitutionnel.fr/le-bloc-de-constitutionnalite/texte-integral-de-la-constitution-du-4-octobre-1958-en-vigueur（1958年第5共和制現行憲法全文）
https://www.bfmtv.com/economie/110-en-10-ans-le-boom-des-ecoles-privees-hors-contrat_AN-202109020014.html（非契約校のブーム、10年で110%増加）。

シャンカラ派の聖典解釈と「出家遊行」

天理大学名誉教授
おやさと研究所嘱託研究員
澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*

シャンカラ派の宗教伝統では、在俗の信者たちに対して、救いに与る方途としてカルマン（行為 karman）とバクティ（信愛 bhakti）のもつ救済論的な意義を説いてきた。また、俗世間を捨離した出家遊行者に対しては、「出家遊行」（サンニヤーサ saṃnyāsa）こそが解脱に到達するのに最も相応しい道であることを強調してきた。ここでは、シャンカラ派において、開祖として信じられるシャンカラの不二一元論哲学をふまえて、いかに「出家遊行」という生き方の意義を説いてきたのかをめぐって考察してみたい。

「体験知」としてのヴェーダーンタ哲学

インド哲学史において、ヴェーダーンタ哲学がめざしたのは、仏教思想などと同じように、輪廻からの解脱であった。それは「哲学」とはいっても、存在の本質を論理的に探究しようとする西洋哲学とちがって、哲学的思惟そのものが宗教的実践を包含している。インドで一般的に「哲学」に対応するサンスクリット語には、「ダルシャナ」（darśana）の語が当てられる。この語は本来、「見る」を意味する動詞の語根√ dṛś から派生した名詞で、その意味は「見ること」、すなわち人間や存在世界の洞察および自覚を意味する。

「ヴェーダーンタ」（Vedānta）の語は、「ヴェーダ聖典の最終部（anta）」を意味する。それはヴェーダ聖典全体の最後に位置するウパニシャッド聖典のことである。このことは、ウパニシャッド聖典がヴェーダ聖典の終結部に置かれているとともに、ウパニシャッドの教説がヴェーダ聖典全体の中で、究極的な教えであることも含意している。ヴェーダーンタ学派はウパニシャッド聖典の意義を解釈学的に考察しようとしてきたが、この学派に属する哲学者たちが究極的に目指したのは、存在の本質の探究ばかりでなく、その本質の探究を超えて、解脱を達成することであった。このようにインドの精神風土では、宗教と哲学は密接不可分に結びついてきた。

シャンカラ派の宗教伝統（スマールタ派とも呼ばれる）において、シャンカラの不二一元論ヴェーダーンタ哲学の担い手は、世俗を捨離した出家遊行者（サンニヤーシン）であった。彼らはウパニシャッド聖典に絶対的権威を認めて、ウパニシャッドの教説を継承するなかで、ウパニシャッド聖典の解釈学として、自らの形而上的体験に根ざした哲学的思惟を展開していった。厳しい修行をとおして、最高実在ブラフマンのみが実在で、存在世界は迷妄（マーヤー māyā）であり、ブラフマンと個的存在の本質アートマンは一体であるという絶対的知識を「体験知」として獲得しようとした。ヴェーダーンタ学派内では、ウパニシャッド聖典が説く最高原理ブラフマンと個的存在の本質アートマンの関わりをどのように捉えるのかによって、さまざまな分派が生じた。彼らはウパニシャッド聖典に依りながらも、自らの形而上的体験を始点として、独自の哲学的思惟を展開していった。彼らはウパニシャッド聖典を典拠としながら、聖典の言葉に込められた意味を自らの体験にもとづいて言説していったのだ。

天啓聖典としてのヴェーダ聖典

ヴェーダーンタ学派の根本聖典は、5世紀初めごろに成立した『ブラフマ・スートラ』（*Brahmasūtra*）であった。この名称は聖典の冒頭（I.i.1）において、「ブラフマンの考察」（brahma-jijñāsā）が宣言されていることに起因している。シャンカラには多数の著作が帰せられるが、彼の主著は『ブラフマ・スートラ』に対する注解書、すなわち『ブラフマ・スートラ注解』（*Brahmasūtrabhāṣya*）である。シャンカラによれば、「スートラ〔「経糸」の意味〕は、花のようなウパニシャッドの聖句を結びつけることを目的とする」と記している。[1] ヴェーダーンタ学派はウパニシャッド聖典について、その真の趣意を明らかにするために特殊な解釈学を展開した。このことはミーマーンサー学派（Mīmāṃsaka）がヴェーダ聖典の規定する祭祀をめぐって展開した解釈学的研究に対応している。

ヴェーダ聖典は、一般的に祭事部（karma-kāṇḍa）と知識部（jñāna-kāṇḍa）に大別される。前者はバラモン教の祭祀を説く部分であり、おもにヴェーダ聖典の本集およびブラーフマナ文献一般がこの部分に相当する。後者は宇宙万有に関する形而上学的考察を説く部分であり、おもにウパニシャッド聖典がこれに相当する。ヴェーダーンタ学派がヴェーダ聖典の知識部に関する解釈学的研究をおこなったのに対して、ミーマーンサー学派はヴェーダ聖典の祭事部をめぐって研究をおこない、祭祀の意義を考察した。両学派はともに正統バラモン教に特有の哲学であり、ヴェーダ聖典を天啓聖典（śruti）とみなし、全ての知識の絶対的根拠と仰いだ。中村元博士も論じているように、「聖典の中に存する種々なる矛盾不整合を、或る一定の立場から統一調和しようとする態度は、両派にともに共通である。[2]」こうした意味で、ミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派は姉妹関係にあった。

「人間の目的」―ミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派の違い

インド哲学の伝統において、「人間の目的」（puruṣārtha）という言葉は、人間にとって最も望ましいもの、人間の行動の究極的目標を示唆している。ミーマーンサー学派では、「祭祀の実行」が「人間の目的」であり、ヴェーダーンタ学派では「解脱」が「人間の目的」であるとされる。この実践的目標の違いは、両学派の哲学の違いを端的に示している。ミーマーンサー学派によれば、ヴェーダ聖典に規定される神聖な祭祀を実行し、現世および来世における繁栄を得て、良い果報を享受することが人間にとって最も重要なことである。したがって、人は生涯、祭祀を実行しなければならない。一方、ヴェーダーンタ学派によれば、「人間の目的」である解脱は最高原理ブラフマンの知識（ジュニャーナ jñāna）から生起する。シャンカラの立場から見れば、祭祀の実行というようなカルマンは「心の浄化」（sattva-śuddhi）という意義をもつ。カルマンはブラフマンの「明知」（ヴィドヤー vidyā）が生起するための手段となるからだ。[3]

シャンカラ派では、祭祀を実行する生活とブラフマンの知識に専心する生活は明確に区別されて、一人の人物が両方の生活を兼ねることは不可能であると言われる。ウパニシャッド聖典によれば、ブラフマンの「明知」は祭祀的行為から独立したものである。こうした内容のウパニシャッド聖典にもとづいて、シャンカラは哲学文献の中で、専ら「出家遊行」の生き方を強調した。ブラフマンの明知を獲得して、解脱に到達するための最良の方途が「出家遊行」であった。[4] シャンカラ派の宗教伝統では、開祖シャンカラの哲学にもとづいて、家庭や財産を捨離することで世俗社会の制約を遁れ、ブラフマンを瞑想して生活することこそが、伝統的に本来的な生き方であるとみなされてきた。

［註］

(1) Śaṅkara, *Brahmasūtrabhāṣya* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1980), I.i.2, p. 50.

(2) 中村元『ブラフマ・スートラの哲学』岩波書店、1951年、59～60頁。

(3) Śaṅkara, *Bhagavadgītābhāṣya* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1978), III.4, p. 108.

(4) シャンカラ派における「出家遊行」については、拙著『シャンカラ派の思想と信仰』（慶應義塾大学出版会、2016年）、218～304頁参照。

技能実習生と日本社会

おやさと研究所
天理ジェンダー・女性学研究室
金子　珠理　*Juri Kaneko*

新型コロナウイルスと供給ショック

新型コロナウイルス変異株オミクロン株が発見され、流行の第６波が心配される冬を迎えた。今秋、日本で流行が収まった理由としては、季節性要因（夏と冬に流行する）が海外メディアでは指摘されている。すでに再流行が始まった国々もある中で、日本でも、ガソリン価格、食料品、輸送費等の高騰が日々報じられている。半導体不足による給湯器などの供給の遅れも生じ、衣料量販店の品揃えにも影響が及んでいる。値上がりだけならまだしも、そもそも「物がない（来ない）」となったら深刻である。食品・衣料・半導体などを生産する国々における、コロナ流行による工場閉鎖などが主な原因であるが、工場隔離（労働者を帰宅させずに工場で寝泊まりさせる）によって、かろうじて生産を続けているところもあるという。とくに食料自給率の低い日本にとって、食料が入って来ないというのは、致命的である。３回目の追加接種も大事であるが、同時に途上国や新興国のワクチン接種を支援すべきであろう。それが食料危機対策の近道となる。

技能実習生への依存

ところで、新型コロナウイルス流行以前より、グローバル資本主義経済に翻弄される、日本社会の脆弱性はすでに明白なものとなっている。日本国内では、農業分野、建設分野、介護現場などにおいて、海外からの技能実習生（以下、実習生）の労働に大きく依存しているからだ。コンビニ弁当の生産工場にしても、最低賃金に近い実習生の労働抜きには考えられない。政府は移民政策を認めていないが、日本は、実質的にはすでに世界第４位の移民国家となっているのである（2016 年の OECD 統計）。

その実習生たちが、コロナウイルス流行により、新規に入国できない状態にあるのだから、現場はもうお手上げである。一方、多くが途上国の農村出身である実習生は、とりあえず自国にいれば食べることだけはなんとかなる。したがって、日本社会の受ける打撃の方がより大きなものとなる。今はまだ経済格差ゆえに、来日してくれる実習生を確保できているが、この先、もっと待遇がよく、人権が保障されている国々を彼らが選択していくことが十分予想される。果して、日本における実習生たちの人権の実情はどうなっているのだろうか？

技能実習生の実情

技能実習制度は、国際社会からは「奴隷制度または人身売買」として、多くの批判を受けている（国連のホルヘ・ブスタマンテ氏による報告書、2010 年）。そして国連は、日本政府に対し、制度の廃止と雇用制度への変更、関連企業から完全に独立した監視・申し立て・救済機能の確立を勧告した。こうした中で、2019 年に、単純労働分野ではたらく外国人の在留を認める在留資格「特定技能」が新設されるに至っている。

近年、中国に代わって増えているのが、ベトナムからの実習生である。2019 年末時点では、21 万 8,727 人に達し、実習生全体の 53％を占めている。2019 年６月 24 日に放映された NHK のドキュメンタリー「ノーナレ」では、今治市の縫製工場で働くベトナム人実習生の劣悪な労働環境がセンセーショナルに報じられ、SNS を通して特産タオルの不買運動まで引き起こした。しかし、ベトナムを中心とした実習生の取材を続けている澤田晃宏氏は、公共放送としてのその番組には違和感を覚えざるを得ないと、述べている。「スキャンダラスに現場を取り上げるだけで、技能実習制度自体への問いかけもなく、管理団体や外国人技能実習機構への言及もない」からだ。ベトナムを現地取材した澤田氏によれば、送り出し機関からの（日本の）監理団体や企業への過剰接待、各種証明書類の偽造、中間搾取による高額な手数料などがたしかにあるという。その中で、100 万円もの多額の借金を背負って来日する実習生たちの中には、運良ければ「300 万円」貯金し、故郷に錦を飾る者もいれば、悪徳業者の餌食となった結果、ハラスメントを受け、あるいは貯金が進まずに失踪する者も存在するという。しかし、上手くいけば、若くして家を建て、商売を始めるなど、日本の若者に比べれば、はるかに夢はあり、大半が以前より良い生活が送れているという。

だが、本来、監督責任のあるはずの管理団体が頼りない場合、労働上の問題が生じたときはどうしたらよいのか？　そこで、2017 年 11 月の技能実習法により「外国人技能実習機構」が創設されたのだが、そこは十分に役割を果たしておらず、実習生の実際の駆け込み先の１つは、寺院である。浄土宗の寺院「日新窟」（東京都港区）は、これまで日本で亡くなったベトナム人実習生や留学生を弔ってきたが、同寺院が知られるようになると、多くの労働相談が持ち込まれるようになったという。日新窟は、まさに「駆け込み寺」となっているのだ。

技能実習生リンさんの裁判

澤田氏のルポでは触れられていないが、「宗教とジェンダー」の視点で看過できないのは、2020 年 11 月、孤立出産での双子の赤ちゃんの死産後に死体遺棄罪に問われている、ベトナム人技能実習生リンさんの裁判である。カトリック系支援団体「コムスタカ 外国人と共に生きる会」によれば、「妊娠が知られたら、帰国させられる」という恐れから、誰にも相談できず、一人で悩みながら仕事を続けるうちに、早産したリンさんは、出産の痛手と死産のショックのなかで、子どもに名前をつけ、弔いの言葉を添えて、タオルでくるみ、箱に入棺し安置した、という。翌日、そのままの状態でリンさんは病院へ連れていかれたが、これらの行為が、死体遺棄罪に問われているのである。2021 年７月 20 日、第一審の熊本地方裁判所は、無罪を主張するリンさんに対して、これが死体遺棄にあたるとして「懲役８年、執行猶予３年」の有罪判決を言い渡した。リンさんは、有罪判決を不服として福岡高等裁判所に控訴し、その第１回公判が、11 月 12 日に行われたが、「証拠調べも証人調べも必要なし」とされ、即日結審した（判決は 2022 年１月 19 日が予定されている）。

実習生には、職業選択や居住移転の自由はもとより、（『技能実習生手帳』には 2020 年１月に追記されたものの）妊娠や出産する自由が実質的には認められておらず、「妊娠すれば強制帰国」が後を絶たないという。同僚に知られる怖れもあるし、日本語がままならぬため外部にも相談しにくい。一般的に、実習生は（留学生も）、本国で使用していた避妊方法へのアクセスが日本では難しかったり、高価だったりする（ベトナムでは 2016 年で IUD が 36.5％）。今のところ、日本では経口中絶薬は認可されておらず、ネットにて取り寄せることとなる。リンさんについては詳らかでないが、日本での孤立出産には、想像を絶するものがある。ベトナムでは死産の報告の義務はないといわれる。一方、日本では死後 24 時間は埋葬してはいけないという法律があるが、おそらくそのような法律をリンさんは知らなかったであろう。リンさんの一連の行為からは、宗教的な弔いの意図を十分に感じ取ることができるが、それが日本では、死体遺棄とみなされてしまう。コムスタカは、「今回の判決が確定するようなことになれば、技能実習生のみならず、日本で孤立出産し死産した女性が刑事罰の対象になりかねません」と危惧の念を表している。リンさんの件は、リプロダクティブ・ライツが保障されているとは言いがたい、日本社会のジェンダー不平等を映し出しているといえよう。

[参考文献]
澤田晃宏『ルポ技能実習生』ちくま新書、2020 年。
コムスタカ 外国人と共に生きる会　http://www.kumustaka.org/index.html　（2021 年 11 月 29 日閲覧）。
国連経済社会局人口部 https://www.un.org/development/desa/pd/data/family-planning-indicators　（2021 年 11 月 29 日閲覧）

5．コロンビアの体質 10

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

おもてなしの親切

「コロンビア人がスペインから引き継いでいる好ましい伝統的高貴な習慣の一つに《歓迎、温かく迎えること》がある。とくに外国人に対して好意的に受け入れる精神的な一面がそうである。それは外国人に満足を与えると同時に、コロンビア人自身もまた、気持ちの上で満足しているのである。[1]」

コロンビア人の家を訪ねると、「入れよ、よく来た、くつろいでね」と、例外なく彼らは言う。とにかく自分の住まいに連れて行くのが常である。普通の一般家庭でも、少し低所得階層の「大衆的」家庭であっても、彼らは家の中のすべてを見せながら案内し、食事の時間外でも「食べていけよ」と誘う。提供する食事は決してご馳走とか特別なモノではない。

筆者は留学時代、知人の家を訪ねた。出された食事は、ジャガイモと油ご飯（コロンビアでは米を炊く場合、塩とオイルを入れる）だけであったが、その味はいまだに忘れない。多くの外国人にとって「居心地の良い」国、それがコロンビアである。

＊ネガティブなイメージとのギャップ

「コロンビア人は歴史的には地域の違い、社会不安、政治的分裂（保守党と自由党の抗争など）の中を生きてきたが、外国人に対しては歓待を示す。[2]」

21 世紀に入っても、いまだコロンビアのイメージは世界ではあまりよくない。それはいわずもがな、1950 年代前後の「バイオレンス時代」や 80 年代～ 90 年代の麻薬抗争やゲリラ、パラミリタリー（右翼武装組織）という「バイオレンス国家」という過去の歴史からのイメージがあり、恐ろしい国（治安が悪い）の一つとして知られているからである。だからこそ、外国人はこの厚い歓待、友情に出会うと面くらう。その意外性も手伝ってか、外国人も現地の人に同化して楽しむことが出来る国なのである。

＊受け入れ

コロンビアは海外からの難民にも寛大である。数年前から治安の悪さで国外へ難民が流失しているハイチに対してもそうだ。とりわけ 2021 年２月のモイーズ大統領暗殺以来、特にコロンビアはハイチからの難民を受け入れている。ハイチの難民たちは、コロンビアを通り、エクアドルもしくはパナマから米国を目指しているが、果たして米国が移民を受け入れるかどうか……。

同じく 2021 年８月、タリバンが新政権を取ったアフガニスタンからの難民も受け入れた。一時的であるにせよ、政治的な背景があるにせよ、これもコロンビア人気質の歓待性と関係があるのではないか、と強引だけれどもそう感じた。

見た目

コロンビア人は「見た目」を気にする、というか見た目でモノの基準を図る傾向が強いと感じている。すなわち、綺麗なモノは良い、汚いモノは悪い。自分のことが、他からみたらどう映るか、見えるかというのは日本人以上かもしれない。日本人は「世間体・世間様」が幅をきかし、一応の行動基準になっている。以前「大きいことは良いことだ」というコマーシャルがあったことを思い出した。1967 年（昭和 43 年）森永エール《Yell》チョコレートの宣伝だった。作曲家・指揮者の山本直純氏がチョコレート持って指揮をして、大勢の人たちが「大きいことはいいことだ！おいしいことはいいことだ！」と歌っているＣＭだ。大きい＝良いというのは、あの「舌切り雀」の欲の深いおばあさんと同じ発想だと思った。

＊おしゃれ

コロンビア人は男女とも「おしゃれ」にこだわる（もちろん社会階層にもよる）。「おしゃれ度」はどういう具合に調査するのかと考えていたら、興味深い資料を見つけた。「コロンビア人はラテンアメリカの中で一番のおしゃれで信仰心が篤い」というラジオ局が調べたデータがあった。主要都市（ボゴタ、メデジン、バランキージャ、カリ、ブカラマンガ、ペレイラ）の消費者に対してのアンケート調査だ。

それによると「衣」が生活で一番大事だと答えたのはコロンビア人の 98％もいる（ラテンアメリカの平均が 65％）。鏡を見て自分を映すのが好きだというのは、コロンビア人 82％（ラテンアメリカ 71％）。自分の容姿に自信があるというのは、コロンビア 98％（ラテンアメリカ 82％）。自分を魅力的だと思うのは、コロンビア 68％（ラテンアメリカ 58％）。また、容姿とは関係ないが、家庭での物事を決める基準は子供たちの嗜好によることが多いというのは、コロンビアでは 93％（ラテンアメリカでは 53％）だそうだ。「子供カワイイ」が際立っている。[3]

＊整形手術

外見重視というとやはり整形手術が関係していると思い、調べてみると、件数はやはり人口の関係上中国や米国が上位をしめており、日本が世界４番目、コロンビアは８番目である。[4] が、人口千人あたりの美容整形手術の件数で見てみると、コロンビアは５番目で、日本は９番目であり、ちなみに中国は 24 番目になっている。整形といっても様々だが、注目はブラジルが件数も頻度も、それぞれ第２番目と第３番目で整形大国ということだ。

形式主義

見た目が大事ということは形式を重視することに繋がる。コロンビアでは人だけではなく、いろいろなところで「形」を重視する。「この現象はまさに我々の民主主義体制の中にあっても見られる。司法や宗教はじめ専門分野の知識上でも、それぞれの本質より外部の形式、例えば、手続きでの書類、シンボルマーク、儀式や証明書など、中身より形の方に優位性をおいている[5]」。

形式主義の長所・短所というのは様々であるが、形さえ整えておけば良いのだというのが長所だとすると、条件が揃わなくも形を整えなければならないのが短所ということになろう。先日の空手道の県大会での話である。審判として参加したのだが、県連盟（バージェ県空手道連盟）から審判全員に高品質マスク「N-95」と携帯用のアルコールが配布された。「連盟も気前がいいね。さすが衛生対策をしっかり考えている証拠だ」と感心した。「さあ、審判の皆さん、写真とりますよ、ちゃんとマスクして、手にはアルコール消毒スプレー持ってね！」とにっこり、ポーズ。写真を取り終わったら、「ハイ、回収！」。全員「？？？」となった。国や県庁に対する県連盟のみごとな「形式主義」であった。

妙なところにこだわり、賢く抜け目なさを出すのがこの国の流儀かもしれない。

[註]

（１）Germán Puyana García, *Cómo somos Los Colombianos*, Panamericana, 2005: 96.
（２）Germán Puyana García:97.
（３）カラコル・ラジオ 2005 年３月２日，https://caracol.com.co/radio/2005/03/02/ entretenimiento/1109755200_157022.html.
（４）http://honkawa2.sakura.ne.jp/2485.html（美容整形の国別ランキング 2011）.
（５）Germán Puyana García: 115.

第3講：130「小さな埃は」

おやさと研究所講師
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

本逸話は、明治16年頃の話である。登場人物の高井猶吉（『逸話篇』では直吉と表記）は当時23歳で、お屋敷へ住み込んでから3年が経ったころのエピソードとされる。今回の講座では、この逸話にみられるおやさまのお言葉と高井猶吉の信仰姿勢、また高井猶吉の信仰実践からまなぶべき日々の通り方について考えてみた。

おやさまのお言葉、高井猶吉の信仰姿勢

おやさまは、おたすけ先から急遽戻った高井猶吉からの質問に対して、次のように答えている。

> どんな新建ちの家でもな、しかも、中に入らんように隙間に目張りしてあってもな、十日も二十日も掃除せなんだら、畳の上に字が書ける程の埃が積もるのやで。鏡にシミあるやろ。大きな埃やったら目につくよってに、掃除するやろ。小さな埃は、目につかんよってに、放っておくやろ。その小さな埃が沁み込んで、鏡にシミが出来るのやで。

ほこりは、たとえどんなに気をつけていても、またほこりが小さい場合は気がつきにくいことから、知らず知らずのうちに、積もってしまい、やがて簡単にはとれないような頑固な汚れになってしまうものである。心のほこりも同様であり、心のほこりが積もってしまった結果として、自分で自分を苦しめることになってしまったり、自覚のないまま周囲の人々に迷惑をかけてしまったりという原因になりうる。このお言葉は、小さな心のほこりに気づき、たえず掃除をすることの大切さを教えている、と考えられる。

また、この逸話にみられる高井猶吉の言動から、親神の話を取り次ぐ際には、自分の考えや思いを話すのではなく、おやさまの教えを、教えられた通りに、そのままお話しするという姿勢が大切である、と考えられる。このことに関して、高井猶吉は、「教祖から聞かせて頂いた話でも、わしは何回でも同じ話をする。何回話しても、一字一句間違わんように話しする。自分の考えや、勝手な言い廻しは一言も入っていない。」（高井猶久『先人の遺した教話（4）教祖より聞きし話・高井猶吉』天理教道友社、1984年、225頁）、「わしの話さしてもらうのも、わしの考えは一つもない。教祖に聞かしてもろうた事、そのままや。我々人間が、どうして考えて話できるものか。」（高井久太郎「"教えの根"生涯掘り続けて」『"逸話のこころ"たずねて　現代に生きる教祖のおしえ』天理教道友社、2013年、245頁）と述べていた。これらの言葉に、おたすけに臨む際の高井猶吉の心構えや信念をみることができ、またおやさまのお言葉をそのまま伝えていくことが大切である、とまなぶことができるのである。

高井猶吉の信仰にまなぶ日々の通り方

お道の信仰者として、心のほこりを自覚し、たえず払うことが大切なのはもちろんだが、より積極的な日々の通り方についても、高井猶吉が語っていた言葉からまなぶことができる。高井猶吉は、「日々の心のつとめ」のなかで「最も大切なこと」として、次の4つをあげている（高井猶久編、上掲書、58～63頁）。

1つ目は「陽気」。これは人間を始める時の親神の思召であり、個人の心定めは、陽気の心になりきること、一家ではお互いに陽気の心で陽気に暮らし合うことが大切である。また陽気ぐらしにおいては、いんねんの自覚とたんのうの心が肝心である。2つ目は、「素直、正直、一筋心」。人間創造に際し、親神がうをとみを呼び寄せた時、わきめもふらず、まっすぐに泳いできた。これが一筋心であり、これより素直、正直なものはない。そして、これを人間の雛型としたのであるから、素直、正直、一筋心が、神より定められた、また与えられた心である。3つ目は「一手一つ」。人間創造の時、それぞれの道具となったものたちは、親神の仰せ通りそのままに一つ心になり、一つの理に向かってそれぞれの立場と役割を果たして、人間が創造された。一手一つというのは、あらゆるもの始まる理となり、またふやす理ともなる。一手一つがなければ、決して個人々々もご守護を頂けず、一家も繁栄しない。一国家についても同じ理である。4つ目は「どうでもやりきる心」。陽気ぐらしにむけて、親神のお働きはやむことがないのである。

このように、高井猶吉は、日々の心につとめ方について説いていた。これらは、親神が人間を創造された時の思召、人間の本来持つべき性質、陽気ぐらし世界建設にむけての人間のあり方や心構えを端的に表しており、私たちが日々を通るうえで、大切な角目となる心の持ち方であり、行いであると考えられる。

また、おやさまから直接お言葉を聞くことができない私たちは、おやさまの教えを人々へ間違いなく伝えるために、教えを充分にまなぶことを、しっかりと意識する必要があるのではないだろうか。高井猶吉は、分からないことがあると、どんなことでも、納得できるまでとことん質問していたため、お屋敷の先輩たちに「お前はれんこん掘りみたいな奴じゃ」といわれ、親しまれていたという。また、「人は字知っとるさかい、書くのに一生懸命で、心に話を聞いていない。わしは字書けんよって、どんな話も性根入れて聞いた」（高井久太郎、上掲書、245頁）との言葉にうかがえるように、文字が書けないからなおさら、おやさまのお言葉や先輩たちの話を真剣に聞き、一度聞いた話は忘れなかったともいわれる。私たちも、日々常々しっかりと教えの「根を掘り」、おやさまの教えを深くまなぶことが不可欠であろう。

本逸話は、いかなる人であっても心のほこりは知らず知らずに積もってしまうということを十分に認識し、「小さなほこり」は、小さいからこそ、注意して見逃さないように心掛け、放っておかずに払う努力をすることの大切さを改めて認識させてくれる。現代は、おやさまご在世当時とは大きく社会的状況も異なるため、普遍的なおやさまの教えをいかに現代の人々に理解してもらいやすいように伝えるか、あるいは社会の様々な問題をどのように教理的に理解すればよいのかを思案することが強く求められていると思われる。高井猶吉の信仰に見られるように、教えの「根」を掘り、おやさまの教えの根幹を人々に伝えること、そして人間創造の元一日にこめられた親神の思召、人間の本質、あるべき姿と行動を心におさめ、日々実践していくことが肝要ではないだろうか。

第16回国際哲学者会議で、本学の教授2名が招待講演

澤井　義次

去る11月18日～20日の3日間、第16回国際哲学者会議「パンデミック以後の人間世界を考える」（Thinking the human world after the Pandemic）が、本学の姉妹校の一つであるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ大学において、オンラインで開催された。

この国際会議には、本学から澤井義次名誉教授（おやさと研究所・嘱託研究員）と森下三郎教授（国際学部）の2名が招かれ、11月19日の夕方、それぞれ英語で招待講演をおこなった。講演テーマとおもな内容は、下記のとおりである。

澤井義次「コロナ以後の世界における宗教意識に関する省察」（"Reflections on Religious Consciousness in the Post-COVID World"）

新型コロナの感染拡大が、現代世界に生きる私たち人間にとって何を意味しているのか、また、生きることのより深い意味とは何かについて、宗教学の視座から論じた。

森下三郎「強靭な身体、強い心―天理教の身体観―」（"Strong Bodies, Strong Minds: A Tenrikyo Perspective of the Body"）

天理教における「かしもの・かりもの」の教理をめぐって、心と身体の関わり、さらに、心のほこりを払って、「人をたすける心」になることの現代的意義を論じた。

第344回研究報告会（11月22日）「教祖のお言葉を求めて」

北村　幸喜（天理教教会本部講習課）

教祖のお言葉は、三原典や『稿本天理教教祖伝』、『稿本天理教教祖伝逸話篇』において相当数を拝することができる。ところが、もっと教祖のお心を求めたい、少しでも教祖を傍に感じたいという信仰者としての欲求が、より多くの逸話や口伝を求めてやまない。教祖のお言葉は、もっとも高いプライオリティを持つ。だからこそ、口伝や逸話を交えた教話が与える影響力はとても大きい。

しかし、講話やSNSで教祖のお言葉として紹介されるものの中には、調べてみると、全く信憑性のない文献からの引用もあれば、全然違う歴史的偉人や他宗の教祖（開祖）の言葉だと分かる例もある。こと教義にかかわる教祖の逸話であるから、修飾や虚構が看過されてはならない。それだけに、どこまでも史料に対する厳密な検証、精査、校訂への慎重さが要求される。

そこで、教祖のお言葉として語られたものの引用元が一目でわかるデータベース化をしていくことが必要なのではないだろうか。信憑性のあるなしに関わらず、その全てをデータベース化しておけば、出典となった文献の性格を判断基準にして、教祖のお言葉としての正確さを検討することができる。さらに、引用元にアクセスし、その前後の記述から背景事情を把握することも逸話を読み解く上で大切である。

戦後から続く復元の道程で、史実を検討する上から資料を集めたり、信憑性の高い逸話がまとめられたりした歴史はあるものの、文献にある教祖のお言葉の全てを集めて整理したものは見当たらない。原典のお言葉を味わい、実践につなげていくことが何にもまして大切であるが、教祖の言行がひとつも歴史の中に埋もれてしまわないように蒐集、整理、保管しておくことも天理教学の歩みの中で急務であると思う。

第46回オーストラリア宗教学会年次大会にて発表

堀内　みどり

標記大会が、ANU（Australian National University）が主催し、12月9日～10日にかけてオンラインにて開催2人の基調講演があり、全体では50余の発表があった。大会のテーマは「希望（Hope）」。また、オーストラリアの主要各地で、会員の懇親会の場が設けられた。

堀内が参加したセッションは、「アジアとオーストラリアの宗教と希望」をテーマとして、4人の発題があった。堀内は、オーストラリアにおける天理教の様子を紹介し、天理教の活動が、現地の人々及び現地の信仰者にとって、希望となっているのかどうかについて、伝道の歴史的経緯を辿りながら考察した。とくに天理教青年会の果たすべき役割の今後の展開が期待されるのではないかと結んだ。

他の発題では、ニューエイジ運動におけるスピリチュアリティ、ラマダーンという生きた宗教的アプローチ、ベトナムの道母（Dao Mau）信仰が取り上げられた。

『グローカル天理』メール配信のご案内

当研究所では、『グローカル天理』を、関係各所やご希望の方々へ配布・配送しておりますが、PDFでのメール配信を開始しました。

つきましては、『グローカル天理』（PDF版）のメールでの受け取りを希望される場合、および紙版の『グローカル天理』の配布・配送を中止される場合は、下記の当研究所メールアドレスへご連絡ください。

なお、当誌はおやさと研究所のホームページで公開しており、そちらでもご覧いただくことも可能ですので、併せてご案内いたします。

皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

連絡先：
天理大学 おやさと研究所『グローカル天理』編集部
E-Mail: glocal@sta.tenri-u.ac.jp
URL: https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html

天理大学おやさと研究所　2021年度「教学と現代」
澤井義次天理大学名誉教授　最終講義

日時：2022年2月25日（金）
　14：00～16：00
場所：天理大学ふるさと会館大ホール

14:00-14:10
　開会挨拶　永尾教昭所長
　趣旨説明　金子昭研究員

14:10-15:10

澤井義次天理大学名誉教授

「生きることの意味とその理解
　―天理教人間学の地平から―」

15:10-15:20　休憩
15:20-15:50　質疑応答
15:50-16:00　閉会

天理大学おやさと研究所
2021年度公開教学講座のご案内
―信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（7）―

【開催趣旨】

教祖のご在世時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』における教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰世界の一端を明らかにしたいと思います。そこでテーマは、昨年度に引き続き、「信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ」シリーズの7回目といたしました。

なお、今年度の公開教学講座は、すべてオンラインで配信することになりました。

第1回（オンライン配信中）永尾教昭所長
　110話「魂は生き通し」
第2回（オンライン配信中）金子昭研究員
　127話「東京々々、長崎」
第3回（オンライン配信中）尾上貴行研究員
　130話「小さな埃は」
第4回（オンライン配信中）澤井治郎研究員
　138話「物は大切に」
第5回（1月5日オンライン配信開始）島田勝巳研究員
　123話「人がめどか」
第6回（2月1日オンライン配信開始）澤井義次研究員
　115話「おたすけを一条に」

おやさと研究所ホームページよりご視聴ください。

グローカル天理
第23巻　第1号　（通巻265号）
2022年（令和4年）1月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒632-8510　奈良県天理市杣之内町1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan